

【書評】

北島英治 著『グローバルスタンダードに基づくソーシャル  
ワークプラクティス—理論と価値—』  
(ミネルヴァ書房, 2016年, A5判, 236頁, 3,200円)

渡部 律子  
(日本女子大学)

ソーシャルワークを取り巻く社会環境と  
ソーシャルワークの価値・理論

本書の書評依頼に先立ち、評者は著者ご本人からこの本を献本頂いていた。その際、著者である北島氏へのお礼状にこのテーマを取り上げてくださったことに対する感謝の意を述べた記憶がある。それは、我が国でも、そして世界のあちこちでも、「他者に対する思いやり」よりも「自己(あるいは自国)の利益」を優先する傾向が強くなり、ソーシャルワークの根幹である「支援が必要な人々に対する共感性」が薄れてきていたことに危惧を抱いていたからだ。そのため、本書の副題にある「価値と理論」は、ソーシャルワーク実践がどこに拠り所を求めて誰のために実践していくのか、を今一度私たちに問いかけてくれている、と感じた。

ソーシャルワーカーは、多様な価値を持つクライアントに向き合い、クライアント固有のニーズを大切にしつつも、組織や制度の枠の中で、クライアントとともに最善の支援法を考え実行していくという使命を持つ専門職であるはずだ。そのため、相反する利益の間に生じるジレンマを日々経験するになる。このような職業的ジレンマは、「想定内」とも言える。評者は、北島氏のテーマとも重なる部分のある、「ソーシャルワークのアイデンティティ」をテーマにして、2015年に先行研究レビューを行った。その際、多くの研究が指摘する課題の根底に、共通性を見出し、「……誰に対し

てどのようなことをすれば真のソーシャルワークと言えるのかと本質を問う、RichimondとAddams<sup>1)</sup>の時代から続くマイクロ対マクロ論争、専門職として備えておくべき価値・倫理・知識・技術はどのようなものでありSWer. はそれらを持っているのか、と問うFlexnerが今から100年も前に問題提起した、ソーシャルワークの専門性議論が、今も姿を変えて様々な国で繰り返されていることがわかる(渡部 2015:11)<sup>2)</sup>とまとめた。さらに、先行研究から抽出した論点の整理として、「(1) SWer. の使命・対象者の認識と実践(誰に対して何をゴールに仕事をするのか)、(2) 知識・技術の基盤の明確さ(専門職を名のれるだけの理論基盤や実践モデルなどを持っているのか、使えているのか)、(3) 政策・制度・組織のゴールとSWer. としての使命のバランスのとり方(相対立するゴールの間でどのような決断を下して仕事をしていくのか)、(4) ソーシャルワークへの科学・理論の応用、実践知・芸術性との関わり(ソーシャルワークは科学として成立しうるのか、アセスメントや支援の段階に必要な援助関係形成やカウンセリング力、経験から生み出された知識の妥当性はどのように証明するのか)、(5) 異なる領域・対象者に対する支援活動を統合する理論・教育の存在(様々な領域で働くSWer. の仕事に共通の視点・実践の枠組みを見出せるのか)……」の5点にまとめている(同上)。もちろん、これらの課題は相互に関連していて、個別に解決をすることは困難であるが、北島氏のテーマにあるソーシャルワークの拠り所である理論と

価値を問い直すことで何らかの解決への道筋が見えてくると考えた。

## 本書の基本姿勢：人/人間を考える

本書は索引も含めると223ページで構成され、2016年11月にミネルヴァ書房から出版されたものである。表紙の帯には「人間の尊厳・社会正義とは」と大きく書かれ、さらに「最初に『人々』を考え社会正義を実現するための実践の本質をわかりやすく解説」とある。評者が特に心を惹かれたのはこの帯にあった「人々を考え」という箇所であった。この表現はさらに「まえがき」にも登場し、“最初に、「人/人間 (A Person/Human-being)」を見よう!”とある。(i) この書評を読んで、「何故、こんな当たり前のことに評者は心惹かれたのだろう」と疑問をもつ人もいるかもしれない。確かにソーシャルワークは人を大切にすることが大前提となっているため、これは自明の理と捉えられるかもしれない。しかし、そのような大前提が実践現場で変化しつつある。超高齢社会、人口減少社会と言われる日本で、医療、年金、介護等の財政は逼迫し、経済効率が最優先されようとしている。そのような状況で、いかにしてソーシャルワークが本来の専門職として価値を見失うこと無く存在しうるのか、今まさに我々の存在意義が問われていると言えよう。ソーシャルワーカーは、人を対象とする対人援助の専門職である。ソーシャルワーカーと名乗るからには、北島氏が主張する「人」を大切にするという姿勢を重視しなければならないし、その姿勢は現実のクライアントとの関わりの中で具体化され、実現されなければならない。

## 本書の「グローバル」の定義

本書はまえがきの中でタイトルにある「グローバル」の定義を試みている。それはこの用語を「地理的広さとしての『世界/国際』(world/international)、あるいは、地理的により狭い『国/地域(national/local)』ということではなく、もう一つのとらえ方をする。……“People First!”で、ソーシャルワークを考えていこうというのである」と

宣言する。つまり、北島氏にとって、本書の中核は、ソーシャルワークの根幹である人間の尊厳、社会正義の実現を目指すソーシャルワークである。北島氏は本書の目的とグローバルの定義に関して「専門職としての共通基盤 (common base) と、それを原則・価値 (principle/value) とする“グローバルスタンダードに基づくソーシャルワーカー”を考えていこうというのである。これを“グローバルスタンダード・ソーシャルワーク”(Global Standard Social Work) という……」と述べる。グローバルスタンダードという用語を聞くと、ついつい国際的に通用するものを意味するのか、と予想する読者のためには、「地理的広がりを対象とするソーシャルワークを“国際ソーシャルワーク”(International Social Work) という」(ii) という注釈をつけてくれている。

## 本書の全体構成と概要・読者にとっての意義

このようにして始まる本書は2部・6章構成である。第I部、第II部ともに各3章で構成されており、第I部は、「ソーシャルワーク・プラクティスの基盤」で第1章は「ソーシャルワーカーとは」第2章は、「ソーシャルワーク・プラクティスの定義・対象」第3章が、「ソーシャルワーク・プラクティス理論の発展」である。著者は本書の読者層を広く設定し、「……実践者・教育者・研究者として自ら問い直し、進んでいこうとする時、一つの道しるべとなれば幸いである」(iv) と述べているが、これまで系統的にソーシャルワークを学習してきた人や教育者にとっては、自らの知識の再確認、また実践家で系統立てて「ソーシャルワークとは何か」を学ぶ機会がなかった人にとっては自分の実践の裏づけ、理論と実践の関係性の確認に有用な3章である。

第II部は、「ソーシャルワーク/プラクティスを発展させた主な理論」というタイトルで、第4章では、「構造的ソーシャルワーク・プラクティス理論」、第5章では、「急進的・批判的・省察的ソーシャルワーク・プラクティス理論」、第6章では、「ソーシャルワーク・プラクティスを総合的に提

示した理論」という北島氏による理論分類のもと、  
各々の理論が解説されていく。

## 社会福祉に携わる人々と理念・職業倫理

2000年の介護保険施行により介護支援専門員という専門職が誕生した。介護支援専門職の基礎資格は非常に広範で、実際の所ソーシャルワークを学んできた人の割合は高くないが、ソーシャルワークの知識やスキルが必要とされ、かつ生かされる領域である。そのような事情もあってか、介護支援専門員として仕事をするプロセスで通信教育などにより日本でソーシャルワーカーと同じ意味あいでは使われることが多い「社会福祉士」資格を取る人々がかなりの割合で存在する。仕事の傍ら通信教育で資格を取ることの忙しさなどもあり、教科書などで一定の知識基盤は学ぶものの、じっくりと時間をかけてソーシャルワークの価値を問い直す、自らの仕事上の課題と照らし合わせる、ソーシャルワークの実践基盤となっている理論の意味を考えてみる、ことに費やす時間はそう多くないだろう。理念がしっかりと身につけてないと、そこで行われる実践は其の時々の制度・政策の方向性によって容易に流されていってしまう危険性がある。最近、社会福祉職に対する社会からのマイナスイメージを作った事件の根底にも同様の原因があるかもしれない。生活保護担当ケースワーカーたちが、生活保護受給者に対する威嚇的なメッセージの入ったジャンパーを着用していたという事件をきっかけに生活保護担当のワーカーたちの専門性の欠如や組織の中での孤立、といった課題が指摘され始めた。何故、社会福祉現場にいる人々がこのような行動を取るに至ったかという議論をきちんとすることの重要性はいうまでも無い。そして、その議論の中で忘れてはならないのが、本書で強調されているソーシャルワークがよって立つ理念・職業倫理であろう。

## 本書の特徴：複数の英語文献の紹介と解説

本書の特徴は、英語で原著を読むのが苦手な人、また短い時間内に主要文献の要点を知りたい人たちに、細かく原著を紹介してくれていること

であろう。例えば、「第1部、第2章(3) ソーシャルワーク・プラクティスの対象としての『脆弱』と『レジリエンス』」では、Gitterman, A. が編者で、その第2版が2001年に出版されている *Handbook of social work practice with vulnerable and resilient populations* (2<sup>nd</sup> Edition) の中で取りあげられている19のクライアントや問題をリスト化し、それらの中から「児童虐待とネグレクト」の項目に焦点をあてて、定義、支援アプローチにおけるアセスメント視点、インターベンション、さらに原著で紹介された事例も時間軸とともに示されている。「児童虐待におけるリスク・ファクターとプロテクティブ・ファクターの生態学モデル」、事例などが約30ページを割いて紹介されている。例えば、75ページでは、児童虐待やネグレクトというものが、親、こども、地域、文化、そしてさらに、親-こどもの相互関係、との間での相互関連性の中で生み出されることを示す概念図が提示されている。

アメリカの児童虐待関連の法律・制度・サービスがよくわかっていないと理解が少々困難ではあるが、この事例の展開モデルを自分自身の日本での実践と対比させながら読むことができれば実践家は大きな学びを得られると感じた。その際、国の違いを越えて共有できるソーシャルワーク専門職としてのあるべき姿やアプローチ、文化や制度による異なりなどからそのままでは実践で使うことが困難だと考えることは何か、またそれは何故か、を考えながら読み進めることを薦めたい。児童虐待・ネグレクトの現場にいる人にとっては、本書で紹介されているような概念モデルを作成しなくても、ここで示されている複数要因の相互関連性の中で問題が生み出されていること、そのため、これらの要素を丁寧に評価・調整しない限り、本来の意味でも問題解決がないことは周知の事実であろう。それにも関わらず、現場での問題解決の方法の中には、このような複数要因を認識しているとは想像し難いものも少なくない。もちろんモデルを作成すればそれで良いというわけではないが、ソーシャルワークが対象とする問題の背景の複雑さを理解し、それをモデルとして提示する

こと、このような概念図が適切に実践で用いられることの重要性を再認識させられる。

同様のスタイルをとり、第3章「ソーシャルワーク・プラクティス理論の発展」では、ロバートとニー (Robert & Nee ed. 1970) が1970年に表した『ソーシャル・ケースワークの理論』(*Theories of Social Casework*)の目次を提示し、解説を加えている。本書は原著の紹介をする際に目次の翻訳も合わせて掲載している。本書を読みながら、目次を「ざっと見する」ことの意味を感じた。つまり、目次の章立てを見ることで、1970年この当時の臨床ソーシャルワークで重要視されていた理論が概観できる。現在の日本の社会福祉士養成課程に主要な理論として取り上げられている心理社会的アプローチ、機能的アプローチ、問題解決アプローチ、現在は認知行動理論と呼ばれるようになっていく人間行動の変容モデルのひとつ「行動理論」、が一般的アプローチに含められ、中間的アプローチとして家族療法、危機介入、社会化、が取り上げられていることがこの目次から見えてくる。北島氏は第3章で、ソーシャルワーク実践理論に影響を与えた思想・理論を辿っていく。ソーシャルワークの実践理論は北島氏が本章で紹介している様々な理論の影響を受けつつ、おそらく「ぶれることの少ない側面を維持」しつつも、「時代の要請や新たな思想の影響を受けて発展」してきているのがわかる。ソーシャルワーク実践を志す人々、あるいは現在実践している人々が自らの実践の基礎となっている思想、理論はどのようなものなのか、また、それらはソーシャルワーク発展の歴史の中でどのように変容・あるいは継続してきたものなのか、をしっかりと理解していることは重要である。ともすれば「スキル獲得」を中心に、あるいは、思想・理論中心になりがちなソーシャルワーク実践の教育に対する反省をしながら本書を読み進めた。第4章、5章、6章でも、北島氏が重要であるとする著書を目次の翻訳とともに解説を進めている。第4章では、ルンディ(Lundy, C. 2011)の著書を用いて「構造的ソーシャルワーク・プラクティス理論」、第5章では、ハウ(Howe, D. 2009)の著書(翻訳も2011年に出版されている)『ソ-

シャルワーク理論への短い入門』(*A Brief Introduction to Social Work Theory*)、最終章となる第6章では、ペイン(Paynen, 1991)、グリーン(Green, 1999)、ターナー(Turner ed. 2011)の3人の著者、あるいは編者による理論紹介がこれまでのスタイルと同様に目次の全訳とともに概要が紹介されている。そこには従来のモデルに加えて新たに登場してきた一般システム理論、生態学的視点、ソーシャルコンストラクションなども含まれ、ソーシャルワーク実践理論に影響を与えた多様な理論を知ることができる。

### 今後の本書の展開について望むこと

これまで述べてきたように、本書は広範な理論をレビューしているという点で、貢献度の高い書である。本書を読めば、ソーシャルワーク実践が単に「暖かい心」だけでできるのではなく、「知的な作業」との統合で成立することがわかる。本書に関する欲を言えば、北島氏が強調した「人/人間」を見るためには、主要文献で紹介されている思想・理論間の関係性、実践上での貢献や課題などをもう一步深めて論じて欲しかった。北島氏が想定した読者層である実践家にとっては、それぞれの文献から抽出された要点がどのように実践で生かしていけるのか、異なる立場をいかに統合していけるのか、どのような実践応用の課題があるのか、という疑問が残るかもしれないと思われた。アメリカのソーシャルワークの大学院では、北島氏の著書で取り上げているような複数の理論的立場の理解、実践への応用を目指した教育が行われる。評者もかれこれ30年以上前そのような教育に携わったが、大学院生たちの多くは、理論と実践の結びつけに悩み教室に戻ってきた。そのため、実習先から戻ってきた学生たちとの間で理論と実践間で生じた課題などを丁寧に振り返る作業が不可欠であったことを思い出す。これまでも数多くの著作を通して日本のソーシャルワーク界に貢献してこられた北島氏が、今後、本書で紹介して下さった価値・理論が日本の実践現場において具体的にどのように応用できるのか、あるいは課題があるのか、に言及した著書を出版してくれる

ことを大いに期待して書評締めくくりたい。

注

- 1) この2人に関しては様々な文献があるが、興味のある方のために、Donna L. Franklin (1986) Mary Richmond and Jane Addams : From Moral Certainty to

- Rational Inquiry in Social Work Practice. *Social Service Review* Vol.60, No.4, 504-525. をご紹介したい。
- 2) 渡部律子 (2015) 「ソーシャルワークの本質と専門職アイデンティティ—アイデンティティをめぐる先行研究に見る現状と課題—」『ソーシャルワーク実践研究』2, 3-18.